

フットパスがつなく、 都市と農村、人と人、地域の力、 そして…

アグリルネッサンス 南幌フォーラム

地域の景観や人とのふれあい、地元の食を楽しむことに加え、健康づくりや環境にも役立つなどで人気上昇中のフットパス。道内各地で特色ある取り組みがすすまれています。南幌町ではこのほど、フットパスの活動主体となる特定非営利活動法人の設立に向けてフォーラムを開催。民間、行政などさまざまな人々が入り混じり、フットパスの可能性と地域の今後を展望しました。参加・聴講し概要をまとめました。(主催/特定非営利活動「ふらっと南幌」設立委員会)(文責/dec)

道央に位置する南幌町は起伏のない平らな地形のまち。稲作を中心とする農業を基幹産業とします。一連の活動がスタートしたのは平成12年。まち全体の活性化をめざして発足した「南幌町街なか活性化委員会」に始まっています。北海道まちづくり景観アドバイザーの濱田暁生氏のアドバイスのもと「まちの宝探し」を始め、行きついたのは幌向駅通や運河、新夕張川など、固有のさまざまな歴史的産業遺産。それらを活かし、運河下りや運河沿いの道などを歩くフットパスウォーキング、駅通まつりなどが行われてきました。フォーラムに先立ち、法人設立代表者でもある濱田氏は「一緒にまちを歩き見えてきた課題は、農業や地元の商工業と都会の人々との出会いの機会づくり。それにはフットパスが最適と考えています。法人化し一步一步積み上げていきます」と挨拶。また三好南幌町長により「本町の安全で美味しい農産物を活用し、協働のまちづくりができることを期待しています」と祝辞が述べられました。つづいて詳しい活動経過報告が行われ、先に述べた取り組みとともに最近では水のまち南幌にホテルを呼び戻そうと、水質調査等を実施していることなどを紹介。今後フットパスを軸としてそれらの活動をつなぎ、まちを活性化させていこうと法人設立への動きとなったものです。正式な法人としてのスタートは来春ごろの予定となっています。

パネルディスカッション

「農とのつながりが地域の未来を拓く」

— 田園フットパス・ウォーキングの可能性 —

パネリスト 磯田氏、高橋威男氏((株)JT北海道 代表取締役社長)、小川麻氏(エコネットワーク 代表)、笠明美氏(南幌町農業協同組合 代表理事組合長)、コーディネーター 濱田氏により、各立場の視点で意見を交換。会場からもユニークな提案等があり、前向きな議論が交わされました。

産業が循環する方向をめざして

コーディネーター 濱田氏

一緒に歩いて知らない人と仲良くなり、作物の生産現場や生産者の顔を見、とれたての野菜などおいしいものを食べ、心満たされて田園の中をまた歩く。楽しく充実感がありフットパスにハマっています。南幌町では農業、商工業、一般市民、町外の専門家などさまざまな顔ぶれで活動していますが、それぞれが本業をしっかりと行い、結果として地域の美しい景観が創られ産業が循環するという方向をめざしています。

トータルで地域が健康になる フットパス

小川氏

南幌町というと田んぼだけのまちという印象でしたが、それは車で通過していたから。車で走るだけでは自分の住んでいるところさえ10年、20年たっても見えないものです。1回歩くことに違いません。2年前に初めて南幌の田園地帯を歩き、素晴らしいに出会いました。とくに細いあぜ道を歩いたのは数少ない経験で、風にそよぐ稲やカエルの声をみんな歓声をあげ楽しみました。地元ではありふれた風景であっても都市部の人にとっては素晴らしい。ありふれたものが地域の財産です。南幌町では農家とのつながりを意図してこの活動を行っており、先進的なモデルとなることが期待されます。

フットパスを歩くことが健康のためのウォーキングと違うのは、地域の活性化つまり地域全体の健康に関わる活動であること。歩く好奇心が湧き、出会った人とのコミュニケーションが

基調講演

「まちぢから」の発見—地域の勇気と決断

磯田憲一氏（財）北海道文化財団 理事長

「まちぢから」とは、そこに住んでいる一人ひとりの力を集め総合力にしていくこと。磯田氏はこの持論を核に、演劇でまちづくりにとり組む富良野演劇工場やオレゴン州・アッシュランドを事例として紹介。また、自ら道庁在職中などに経験し発信した北海道スタンダードのいくつかを披露しました。その一つは

十数年前に渡島支庁から始めたタクシーのデイトレ運動。それまで支庁長として行う交通安全運動は「濡りかけをして道路脇に立ちティッシュを配ってお礼を言われる」というもの。その効果に疑問を感じ、より効果的な方法としてデイトレ運動を実現させたということです。「お互いの安全意識を高める“光の



対話」という発想でした。「これまで」という考えにとらわれず、モノサシを変えて独自の発想で決断し「まちぢから」にしていくことが大事です」等と、「ふらっと南幌」へのメールを送りました。

ふらっと南幌のホームページ <http://www.flat-nanporo.com/>

今凶悪犯などのニュースが増えています。失われつつある生命観を育むことができるのも農村地帯だという気がしています。

北海道は日本の中でも亜寒帯に属し植生や農村の景観が特異、先史時代の縄文文化、アイヌ文化といった歴史的特異性もあります。これらをどう活用するかという観点からもフットパスにとり組んでほしい。グリーンツーリズム、アグリツーリズムなど農業との連携や、移住体験など行政サービスと連携する新しい流れもあります。フットパスで産業やサービスをつなぎ、地域力と競争力をつけていくことができます。

農村と都市部、お互いに理解を深めよう

荒明氏

農業環境が厳しい中で農家は努力しています。フットパスの活動で我々地元には気づきにくい部分が見直され、農業への理解が深まり生産環境がよくなっていくことを期待しています。

当町の農家戸数は250戸。メインは水稲、他に小麦、大豆、キャベツなど。とくにキャベツ生産と農業法人数の多さで全国的に知られていますが、コスト面や後継者問題など、いずれも見通しは厳しい。しかし命を預かる最も大事な仕事であることを誇りに思っています。特に安全・安心に気を配り、たとえばビュアライス生産、堆肥による健康な土づくりのとり組みなどを行い、一方、大胆な発想による転換も必要と検討しているところです。フットパスを契機にもっともっと農村や農業をふり返ってもらい、大勢の人が来てたくさん食べ、購入していただけたらと思います。我々としてもさらに健康な

農産物づくりに努力し、できる限りのお手伝いをしていきたいと思っています。

訪れた人を徹底的にサポートするシステムを

磯田氏

大都市の近郊南幌町として、新しいライフスタイルを求める人たちをいかに呼び込むか。五感の次に感じるものは、やはり人との関わりだと思います。来てほしいと安売りするのでなく自分たちの流儀をしっかり守り、来た人をトータルにサポートする。たとえばおじいちゃん・おばあちゃんによる子育てサポートを提供するなど、徹底したシステムをつくってはどうか。

会場から

●これから大事ななのは南幌の暮らしをいかにデザインするか。外から見て羨ましいと感じるようないきいきとした暮らしづくりが、いい景色をつくるのです。南幌では美味しいものが生産されていますが、地元でどれだけ利用しているかが問題。農家はぜひ地元のものを食べ、健康で長生きし、世界に誇れる南幌らしい農業と暮らしを創ってほしい。

●雑木林の中にフットパスをつくり、心の病気の癒しに効果があることがわかってきました。ドイツでは薬代わりに「どのコースを時速何キロで歩きましょう」とフットパスが処方されています。フラットな南幌は定点で風景や先人の魂を感じ取ることができる数少ない地形。コース上に定点を織り込んではどうでしょうか。

●南幌町に住んで13年。食べものが美味しい南幌町に感謝しています。今は大事な第二のふるさとになりました。



会場に設置されたとれたて野菜など南幌町特産品の販売コーナー。安全、安心、安い、そして美味しいと人気!

あり、そこに上下関係はなくストレスがない。そして美味しいものに出合う。美味しいものとの出会いは1回で終わらずどんどん広がる。つながる。トータルとして地域が健康になるのです。ただ、歩くときこうした理屈を考える必要はありません。気持ちよく楽しく歩けばよいのです。

農業や行政サービスとの連携で地域力を

高橋氏

旅行会社として本州方面の方々に北海道をどう案内楽しんでいただくか、10数年前から各地を歩いて回り考えています。南幌町の印象は空の青さ、田んぼの緑の美しさ。心と体のバランスを保つため健康への意識がよくなっている都会人が求めるものです。また、昨